



江戸時代中後期における煎茶趣味の展開と 煎茶道の成立

安 永 拓 世

概要 本稿は、18世紀中期から19世紀にかけて京都や大坂で流行した煎茶趣味が、芸道としての煎茶道へと変容するプロセスの解明を目的とする。とくに、大坂を中心に活躍した煎茶道の家元・田中花月庵鶴翁（1782～1848）を題材とし、当時の文人たちと花月庵との交流関係や、それを記した資料を通して、①日本に煎茶を広めた売茶翁（1675～1763）という人物が神格化され、彼に結びつく花月庵が権威付けられて作り上げられていく言説。②その言説に寄り添うかたちで付加価値がつけられる煎茶道具。③新興の芸道である煎茶道が、既存の芸道である茶の湯から受けた影響。という主に三つの視点から考察をおこない、家元が作られていく過程に迫る。

Abstract The purpose of this paper is to solve the process in which the “Sencha Tea” hobby, that was in fashion by Kyoto and Osaka from the middle of the 18th century to the 19th century, changes into the “Sencha Tea” ceremony. Here, I deal with Tanaka Kagetuan Kakuo(1782～1848) who became the head family of the “Sencha Tea” ceremony in Osaka.①Baisao(1675～1763) was deified, the head family was connected to him, and the statement was made. ②The tools of “Sencha Tea” with which added value was given based on that statement. ③The “Sencha Tea” ceremony was affected from the “Cha-no-yu” tea ceremony. From these three viewpoints I approach the process in which the head family was made.

キーワード 煎茶趣味, 煎茶道, 田中花月庵鶴翁, 売茶翁の神格化, 茶の湯からの影響
原稿提出日 2012年11月30日

はじめに

本稿の目的は、江戸時代における煎茶趣味が、単なる余技であった段階から、芸道としての煎茶道へと変容していく過程を解明することで、煎茶道成立の実像に迫り、従来ほとんど取り上げられる機会がなかった煎茶道を、江戸時代の芸道の中に位置づけることにあたる。その際、茶の湯⁽¹⁾との相関関係のなかで、煎茶趣味の変容をとらえることで、既存の芸道に対する認識という観点から煎茶道成立の方向性を探りたい。なぜなら、このことが芸道成立における近世的特質を浮かび上がらせる結果になると考えるからである。

江戸時代における煎茶趣味は、享保20年(1735)に、売茶翁(高遊外, 1675~1763)が京都の市中で煎茶を淹れて売り歩く売茶活動をおこなったのを契機とし、京都や大坂で勃興した⁽²⁾。その後、大枝流芳(生没年未詳)、木村兼葭堂(1736~1802)などの文人たちを中心に、中国への憧憬を基盤に展開した中国趣味や文人意識⁽³⁾の流行を背景としながら愛好されるようになり、さらに、上田秋成(1734~1809)や村瀬栲亭(1744~1818)へと受け継がれ、木米(1767~1833)、田能村竹田(1777~1835)、頼山陽(1781~1832)などの啓蒙により、広汎な展開をみせる。これに呼応する形で、さまざまな煎茶書の刊行が相次ぎ、江戸時代後期にかけて煎茶趣味は広く享受されていく。かかる動きは、やがて宗匠の誕生を促し、芸道としての煎茶道を出現させた⁽⁴⁾。

このような煎茶に関する具体的かつ包括的な研究は、あまり多くはない。だが、その中において、熊倉功夫氏と楳林忠男氏の研究は、思想史・芸能史的観点から煎茶趣味を論じ

-
- (1) 本稿では、煎茶と区別するため、抹茶を茶筥で攪拌して飲む芸道としての茶道を「茶の湯」と呼称することとする。なお、この茶の湯は、史料中では「点茶」として記載されることが多く、一方の煎茶は、史料中では「煎茶」「煮茶」「烹茶」などの記載がある。
- (2) 「煎茶」が売茶翁以前に日本で全く飲まれなかったわけではない。そのことは、熊倉功夫『近代茶道史の研究』(日本放送出版協会, 1980年)、大槻幹郎「黄檗山の開創と煎茶」(板橋区立郷土資料館編『長崎唐人貿易と煎茶道—中国風煎茶の導入とその派生—』1996年)などを参照。だが、本稿では、明末清初の文人趣味を背景に、黄檗山万福寺などを通じ、抹茶に代わる新しい茶の飲み方としての「煎茶」が文人たちに紹介され、とりわけ売茶翁以後の煎茶を嗜み、愛好する現象を、「煎茶趣味」と呼称する。また、題目に掲げた江戸時代中後期という時期を、本稿では、煎茶趣味が勃興するきっかけとなった売茶翁の売茶活動が、享保20年(1735)であることから、若干それに先行する18世紀初頭以降からの時期として考えるものとする。
- (3) 中村幸彦「近世文人意識の成立」(『中村幸彦著述集 11 漢学者記事』中央公論社, 1982年)を参照。
- (4) 後掲の『浪華煎茶大人集』(天保6年(1835)7月成立)の中に田中花月庵を指して「浪花の宗匠たり」という記述があることから、「宗匠」という認識は、当時から存在したものとみられる。ゆえに「宗匠茶」という呼称を用いる方が、実状に即していると考えられるが、本稿では茶の湯との混同を避ける必要性から、宗匠茶とほぼ同義に、家元が出現し芸道として煎茶が嗜まれるようになったことをもって「煎茶道」という表現を用いるものとする。なお、前掲注(2)の「煎茶趣味」という表現は、この「煎茶道」をも含む、より広義の煎茶愛好現象を指す。

た先駆的研究として、また現在の水準を示す研究として重要なものである⁽⁵⁾。しかし、両氏の研究は、煎茶趣味の展開を単なる茶の湯批判の表面化として一面的に解釈している。たしかに、売茶翁の活動が示すように、当時の禅宗や、それと結びつく茶の湯への批判は、煎茶趣味の思想的基盤として機能した。だが、実際には、茶の湯同様に形式化を進めた宗匠茶としての煎茶道が、江戸時代後期にかけて受容されていった。両氏の研究ではこの矛盾が十分に説明されていない。もしこれを説明しようとするなら、煎茶趣味はその展開の中で何らかの変容を遂げたと考えなければならないが、この煎茶趣味が煎茶道へと変容していく実態は、詳らかにされずきたといえよう。

本稿は、その煎茶趣味の展開における変容の過程を、具体的に解明しようとするものである。ここでは、煎茶趣味の変容の契機となった要因を指摘することで、変容の具体像を示したい。その際、手がかりとして、煎茶道で最も早くに宗匠となった、大坂の田中花月庵鶴翁（1782～1848）を題材とする⁽⁶⁾。花月庵は、兼葭堂や竹田、山陽などとの交遊もあり、各地の文人たちに大きな影響力を持っていたとみられることから、江戸時代後期の文人にとっての煎茶に対する価値観や意識の解明にも、花月庵を考察対象とすることは有意義だろう。そこで、本稿の方針としては、まず、花月庵が宗匠として認知される際に権威付けとなった諸要素を抽出する。次に、その要素を、花月庵以前の煎茶趣味の段階に戻って検討することで、煎茶趣味の変容の実態とその要因を明らかにしたい。さらにこれを敷衍して、煎茶の宗匠の成立について考察を進めれば、家元なるものが成立していく際の、一つの縮図をも示せるものと考えられる。既成の芸道との関連性という視点から、茶の湯との比較を試みるに、煎茶趣味は格好の素材であるといえるだろう。

第1章 煎茶道の成立と田中花月庵

第1節 田中花月庵の事績

花月庵を考察の対象とするにあたって、まずは、花月庵の事績を確認しておきたい⁽⁷⁾。

花月庵は、天明2年（1782）に、大坂島之内小西町の酒造業者の子として産まれた。幼

(5) 前掲注(2)熊倉書『近代茶道史の研究』、榎林忠男『煎茶の世界』（徳間書店、1971年）、小川後楽『NHKライブラリー80 煎茶への招待』（日本放送出版協会、1998年）などを参照。

(6) 田中家は、煎茶花月庵流の家元として、代々花月庵を名乗り、田中花月庵鶴翁はその初代にあたる。本来なら、「田中鶴翁」と表記すれば後代との混同は避けられるが、鶴翁の号を一条忠香より賜るのが天保9年（1838）であり、本稿では時期的に、主にそれ以前の煎茶趣味の展開を考察する。ゆえに、単に「田中花月庵」あるいは「花月庵」と表記する場合、初代花月庵鶴翁を指すものとする。

(7) 花月庵の事績についての研究は、田中楓谷『花月庵鶴翁小伝』（私家版、1927年）、田中青坡『煎茶 花月庵』（主婦の友社、1973年）がある。

名は亀之助。16歳で襲名して新右衛門と称す。名は賀寿。菊井館、毛孔、三種亭などとも号した。文政年間（1818～30）ごろから黄檗僧の聞中浄復（1739～1829）に師事して禅と煎茶を修め、文政7年（1824）ごろ煎茶家として独立したと考えられている。その後、天保3年（1832）には江戸へ行き、将軍である徳川家斉（1773～1841）へ献茶したほか、綾瀬川に舟を浮かべて茶席を設け、谷文晁（1763～1840）、大窪詩仏（1767～1837）、平田篤胤（1776～1843）を招いたという。翌天保4年（1833）に中国西湖の水を長崎奉行を介して入手し、8月中秋にこれを用いて観月の茶席を開いた。また天保9年（1838）4月には一条忠香（1812～63）に招かれて献茶し、忠香より「鶴翁」の号を授かり、同年9月再び一条忠香に招かれ「煎茶家元」の染筆『紫の巻』を賜る。同年同月に、紀伊徳川家と尾張徳川家、同年10月には千種有功（1796～1854）のもとで献茶。天保10年（1839）4月に興正寺で、同年8月中秋に法隆寺太子殿で、天保11年（1840）11月には一条忠香の招きにより仙洞御所へと献茶を重ね、煎茶の家元として確固たる地位を築いたが、嘉永元年（1848）67歳で没している。

第2節 田中花月庵の知名度

前節で、花月庵の事績を述べたが、この花月庵は、煎茶家として当時の大坂でどれくらい知られており、また、当時の煎茶趣味の状況を、どれほど反映しているのであろうか。まずはその検討のため、本節では、当時大坂で出版され、人々の目に比較的多く触れたであろう史料を中心に、花月庵の知名度を見てみよう。

管見の限り、刊行物における花月庵の初出は、文政6年（1823）刊行の『続浪華郷友録』であり、次のようにある。「花月庵 号菊井館、姓田中、住清水町、宅中有井、旧名云浪華清水、自後呼云菊清水、今醸酒以此為井号菊之井、清冽且甘、常取此水煮茶、亦異他水」。加えて、同年刊行の『売茶翁茶器図』にも、売茶翁の茶具の所蔵先として花月庵が挙げられている。また、翌文政7年（1824）刊行の『新刻浪華人物誌』の「文雅」の項にも「田中毛孔 名毛孔、字軽汗、号花月菴、清水町 田中新右衛門」とある。さらに、文政11年（1828）に刊行された秋里籬鳥（生没年未詳）の『築山庭造伝 後編』には花月庵の詳細な記載があるので、長くなるが紹介しよう。「花月菴は東横堀の西岸の高樓なり、淀川の支流は居ながら結ぶ、眺望の所は高津の台なり、生玉の森をかすみに浮び南には瓦屋橋を帯に、庭中は又西湖の柳、宮城野の萩、枝をまじへ、神潜石、炙報石を置きて、煎茶の玉川庭の全なる庭格を備へ、庵内には陸羽、廬全の肖像に売茶翁の石像を安置し、毎月十六日は売茶忌をつとめ、諸方の雅人自ら集り風流を営むに、主人ひねもす茶を煎じ給ふこと月並に

怠ることなし、又三月六日陸羽忌を訪ひ、としの新製、口を切つて翁にこれをつとめざるうちは主人をはじめ、としの新製喫することをいましむ、煎茶の一風を起すの一人也」。

これらの記述から、文政年間（1818～30）ごろから、次第に花月庵の知名度が高まり、「煎茶の一風を起すの一人」として認識されるようになったことがうかがえよう。その上、天保年間（1830～44）刊行で檜垣真種（生没年未詳）が著した『浪華風流繁昌記』には「賀壽田中氏、字ハ儉徳、花月菴鶴翁ト号ス、又松風清社、毛孔、三種亭、其行等ノ号有、煎茶ヲ好其法高遊外翁三世ノ伝統ヲツギ一家ヲ開ク、諸国ニ門人多シ」とあり、煎茶の「一家」を開き諸国に門人がいたことがわかる。また、天保6年（1835）成立の『浪華煎茶大人集』⁽⁸⁾には「浪花の宗匠たり」とあり、花月庵の門下である人物が4名掲載されている。天保8年（1837）版『続浪華郷友録』には「煎茶」の項があり24名を載せるが、その筆頭に「花月庵 号毛孔、清水町 田中新右衛門」とある。さらに、嘉永元年（1848）刊行の『浪華当時人名録』の「茶道」の項に煎茶家では唯一「花月庵 九之助橋南、名賀字、子行、煎茶之中祖」として載っている。

以上に登場する花月庵の記事により、文政年間（1818～30）ごろから花月庵は当時の大坂でかなり著名な存在となり、天保年間（1830～44）ごろには煎茶の「宗匠」として認知され、門人を取っていたことが判明する。さらに、その認識は、花月庵の没年の嘉永元年（1848）まで続いていることから、花月庵は当時の大坂で煎茶家として中心的な存在であったといえよう。この花月庵の知名度の高さは文晁、詩仏、篤胤、竹田などの大坂以外の文人たちと花月庵との交遊からも裏づけられる。

第3節 煎茶道成立の要素

前節で見たように、花月庵は、当時の大坂で煎茶の「宗匠」として認められていた。であるならば、花月庵に宗匠としての何らかの権威付けとなる要素があったものと想像される。そこで、花月庵が宗匠として認識された要因、すなわち、花月庵を権威付けた要素を抽出し、それに注目することで、当時の煎茶趣味に対する人々の意識を垣間見てみよう。

たとえば、文政6年（1823）から文政7年（1824）にかけて、京都や大坂に遊学していた田能村竹田は、花月庵と交遊があり、その著作や日記中に花月庵のことを頻繁に記している。この文政7年（1824）は、花月庵自身が煎茶家としての旗揚げを宣言する意味を込

(8) 大阪府立中之島図書館所蔵。折本一帖。大里浩庵（生没年未詳）著、自筆本。天保6年（1835）7月の自跋あり。浪華在住の煎茶の名家22名を挙げ、見開きの右面に肖像画を、左面に略伝を記す。恩賀敬子・平野翠・多治比都夫「複製と翻刻 人物誌二種—浪華煎茶大人集・浪花三十六佳人—」（『大阪府立中之島図書館紀要』19、大阪府立中之島図書館、1983年）に所収。本稿の第1章第3節【史料1】に詳しく挙げる。

めて書いたとされる『花月庵鶴翁茶売詞』⁽⁹⁾の成立した年である。すなわち、竹田の残した記事は、当時の文人たちの間での花月庵に対する認識を知るうえでも貴重な史料といえる。また、当時の大坂の煎茶家を取り上げた史料に天保6年(1835)7月に成った先述の『浪華煎茶大人集』がある。同書は、浪華在住の煎茶の名家22名を列挙するが、その中心的存在として花月庵が挙げられている。そこで、本節では、竹田の著作や日記をはじめ、『浪華煎茶大人集』に登場する花月庵の記事を比較・検討し、花月庵が煎茶の宗匠となり得た主要要素を抽出してみたい。まずは、次の『浪華煎茶大人集』の記事を見てみよう。この記述は花月庵を権威付けた要素を端的に示している。

【史料1】

花月庵翁、姓は田中、茶名は毛孔と呼べり。売茶翁より煎茶の脉絡をひきて三代に至れり。高翁が手馴し茶具等をつたへ、その外、隠元禪師明朝より持来りし煎茶の古器を蔵せり。翁が死生の日十六日なれハとて、連月既望、煎茶を施せり。又三月六日陸羽忌と称して新茶を手製し供すること、花翁より起これり。浪花の宗匠たり。俗称新右衛門と云て、九之助橋浜手に居宅あり。

花月庵を権威付けた要素として、まず第一に挙げられるのは、売茶翁からの系統の正統性だろう。【史料1】の「売茶翁より煎茶の脉絡をひきて三代に至れり」の部分がそれを物語るほか、先の『花月庵鶴翁茶売詞』にも「聞師は高居士に随ひ茶道を授り、又僕に伝へ給ふ。是に於て豁然として吾高翁一風煎茶三味の旨を得るに似たり」とあり、【史料1】と同様、売茶翁から聞中を通して花月庵へという売茶翁からの系統を継いだみずからの正統性を花月庵自身が主張している。かかる主張は、竹田の『屠赤瑣々録』に見える「花月庵主人云ふ。当時高游外翁に随侍せし人の世に生残りたるハ聞中和尚菴人なり。和尚京北一乗寺村の桂林庵に住す。今茲己丑に年九十一歳とそ」⁽¹⁰⁾という記述や、前述の『浪華風流繁昌記』に載る「煎茶ヲ好其法高遊外翁三世ノ伝統ヲツギ一家ヲ開ク」とも重なる。以上の史料から、花月庵は聞中を通じて売茶翁からの系統を継いだ「三世」であるという主張が、人々の間で受け容れられ、花月庵の宗匠としての地位を権威付ける要素として機能していることがうかがえよう。

続いて挙げられる権威付けとなる第二の要素は、器物の伝来である。それは【史料1】

(9) 前掲注(7)田中楓谷書に所収。

(10) 『〈大分県先哲叢書〉田能村竹田資料集 著述篇』(大分県教育委員会、1992年)に所収。なお、史料中の「己丑」は文政12年(1829)を指す。

に「高翁が手馴し茶具をつたへ、その外、隠元禪師明朝より持来りし煎茶の古器を蔵せり」とあることから指摘できるが、ここでは、次の『田能村竹田日記』文政6年（1823）3月20日の記事を挙げてみたい⁽¹¹⁾。

【史料2】

売茶翁の弟子に三人の兄弟あり。兄を古道といふ。黄檗山の蔵主となる。次を無参といふ。一生飄然無住にして死す。末は女子に而尼となる。亦観ル所あり。観掌といふ。茶白山の側小祇林に住す大坂府の医人三宅文昌ハ、この三人の肉姪にて今年七十四五歳斗なり。文昌の近隣の田中屋あり。茶を嗜む。予此人と今年三月廿日始て相知る。其花月亭ニテ茶ヲ喫ス。

小祇林に売茶翁の九条褐色の布袈裟ヲ蔵ス。其外掛物三幅、硯箱壺ツ、鉄槌壺ツを蔵ス。三宅文昌の宅に翁の茶ヲ売ル店の旗ヲ蔵ス。清風の二字を書す。亦掛物六七幅斗あり。田中屋ニ翁の掛物三幅、並ニ茶壺三、古銅風炉及雑具六七種ヲ蔵す。多ク小祇林ヨリ出ツ。只古銅風炉ハ古道蔵主より伝来すといふ。

田中屋ニ翁の遺像あり。□□秋平なる者二ツを作る其一なり。秋平ハ本ハ□□人今の松風亭の父なり。又魯寮大潮の作、翁の賛語ヲ蔵ス。又若冲画翁像アリ。大典賛ス。田中屋、大江流芳の画山水一幅ヲ蔵ス。流芳別称岩田傲芳。又号岩四川。

流芳又号清湾。家を網島ニトス。此処の水清潔甘烈。浪華第一とす。故に清湾と号ス。

以上三月廿日華月亭席上ノ話ヲ記ス

この【史料2】の記述は、当時の煎茶の器物への関心の高まりを顕著に示している。と同時に、花月庵が彼以前に煎茶を嗜んだ人々の伝来品や器物を多く所蔵・収集していた事実をも明らかにする。同様のことは、『築山庭造伝 後編』に載る、大窪詩仏が花月庵に贈った「贈花月庵主人」という漢詩などからも読み取れる。これらから、花月庵所蔵の器物が当時の人々の関心を集め、花月庵がその所蔵品を背景に、宗匠としての地位を確立していったことがうかがえよう。

最後に、花月庵を権威付けた要素として、第三に挙げられるのが、法式・点前・茶会などの整備である。それを示す史料として、花月庵が天保9年（1838）に一条忠香から賜った『紫の巻』⁽¹²⁾の巻頭部分を挙げよう。「今難波の花月庵は、むかし遊外翁の伝へを得て茶

(11) 前掲注(10)『田能村竹田資料集 著述篇』に所収。

(12) 前掲注(7)田中楓谷書に所収。大阪市立美術館編『特別展 文人のあこがれ、清風のこころ 煎茶・美とそのかたち』（大阪市立美術館、1997年）作品解説43を参照。

どうの式をうかつ。清雅にして艶なり。天下の妙といふべし。ちゃを好めるものこの規矩によるへし」。この史料からは、花月庵が「遊外翁の伝へを得」た「茶どうの式」を穿ち、その「規矩」を整備していたことがわかる。また、花月庵自身が『清風流烹茶諸式詳解』なる著述を残していることから、花月庵によって法式・点前の整備がなされていたことがうかがえよう。となれば、【史料1】中の「翁が死生の日十六日なれハとて、連月既望、煎茶を施せり。又三月六日陸羽忌と称して新茶を手製し供すること、花翁より起れり。浪花の宗匠たり」という記事も、法式・点前・茶会などの整備が、宗匠としての花月庵の一つの成果として認識されていた証しとして読めてくるのではなかろうか。

さて、花月庵を権威付けた要素として以上の三点を挙げたが、この三要素の重要性と妥当性を、花月庵以外の煎茶家の視点から確認し、補強しておく必要もあるだろう。ここでは『浪華煎茶大人集』と天保8年(1837)版の『続浪華郷友録』との両者に登場し、当時の煎茶家の中で比較的著名であった野里梅園(1784~?)、殿村茂濟(1795~1870)、二代目兼葎堂木村石居(1776~1838)⁽¹³⁾の3名を取り上げて三要素の検証をおこなってみたい。まず、野里梅園であるが、『浪華煎茶大人集』には、「高翁煎茶太平の味をよく知て」「性来骨董を好みて鑒定の一家をなす」とある。これによれば、売茶翁とのかかわりは記述され、売茶翁からの系統と思しき点の主張はみられる。だが、道具の鑑識眼は持っているものの、売茶翁所縁の茶具を所持していた旨は記載されていないし、法式や茶会についても触れられない。つまり、先に挙げた第二、第三の要素が欠落しているようなのだ。次に殿村茂濟はどうだろうか。『浪華煎茶大人集』に「高翁所持の茶瓶を伝て烹茶をよくす」という一節があり、これは売茶翁伝来の茶具を所蔵し、煎茶を淹れる技術が優れていることを示しているようだが、明確な売茶翁からの系統の正統性や点前の整備については叙述されない。すなわち、第一、第三の要素が不足しているのである。最後に、木村石居の場合を見てみよう。同じく『浪華煎茶大人集』によると「翁の名の為に風流今に盛なり」「高翁の遺器を半ば蔵せり」と記載され、煎茶趣味における彼の存在の重要性とその地位の高さは述べられるが、先の三要素については、売茶翁の茶具を所蔵する第二の要素のみで、他の二要素に関しては語られない。

このように、花月庵以外の宗匠となり得なかった人々には、先の三要素のいくつかが当てはまらない。もちろん、彼らには煎茶以外にそれぞれ本業があり、その意味で煎茶は文字どおり趣味であったともいえる。すなわち、みずから宗匠になろうとする意志や積極性

(13) 木村家も田中家同様、代々兼葎堂を名乗るが、本稿では、単に「木村兼葎堂」あるいは「兼葎堂」と表記する場合、初代兼葎堂木村孔恭を指すものとする。

の有無の問題もあるだろう。だが、たとえば野里梅園などは門人も若干存在したようで、宗匠となる意志があったものと想像される。そのような状況で、彼らが宗匠となり得ず、花月庵が宗匠となり得たのは、先の三点が宗匠となるための重要な要素だったからではなからうか。

以上のことから、花月庵の宗匠としての拠り所や意義は、先の三点に集約される。花月庵が当時の煎茶趣味の状況を大きく反映することは、すでに見たとおりである。ならば、この三要素が煎茶趣味の中でいかに発生したかを探れば、煎茶趣味の展開の具体像も見えてくるだろう。次章では本節で抽出した三要素それぞれについて、花月庵以前の状況を追うことでそれを明らかにしてみたい。

第2章 花月庵以前の煎茶趣味の動向

第1節 売茶翁の神格化

先に第1章で挙げた三つの要素が、「宗匠」となるための重要な要素であるならば、それが煎茶趣味の中でどのように醸成されたかを検討することで、煎茶趣味が煎茶道へと変容した様相が見えてくると考えられる。そこで、本章では、先の三要素について、それぞれ花月庵以前の状況を見ることにより、煎茶趣味の変容の実態とその要因を解明したい。

まず、本節では、先に第一の要素として挙げた、花月庵が売茶翁の系統を主張する意味を、煎茶趣味の展開の中で、売茶翁がどのように認識されたかを探ることで検証しよう。

売茶翁については、古く福山暁菴氏の詳細な研究があるほか⁽¹⁴⁾、近年は、煎茶を媒介とするネットワークへの関心が高まり、狩野博幸氏や水田紀久氏などによっても分析されている⁽¹⁵⁾。その結果、売茶翁の事績研究や、売茶翁を中心とする交遊関係については、かなりの部分が明らかとなったが、ここでは、売茶翁の事績や人物そのものではなく、煎茶趣味の中で売茶翁がどのように語られ、認識されていったのかを、あらためて見直す必要があるだろう。

売茶翁が京都の市中で売茶活動をしたことが、当時の人々に大きな影響を与えたことは

(14) 福山朝丸『売茶翁年譜』（其中堂、1928年）、福山暁菴『売茶翁』上下2冊（其中堂、1934年）などを参照。

(15) 狩野博幸「十八世紀という時代」（京都国立博物館編『十八世紀の日本美術』、京都国立博物館、1990年）、水田紀久「売茶翁グループ—秋成の茶道—」（高田衛編『論集近世文学 5 共同研究 秋成とその時代』勉誠社、1994年）、早川聞多「売茶翁といふ事件—『對客言志』をめぐる—」（千宗室監修、熊倉功夫・田中秀隆編『茶道学大系 1 茶道文化論』淡交社、1999年）、古野沙弥香「江戸文人の視覚文化—売茶翁を中心として—」（『野村美術館研究紀要』21、野村文華財団、2012年）などを参照。

間違いない。何よりもそれは宝暦13年（1763）の『売茶翁偈語』の刊行に如実にあらわれている。売茶翁のもとに大潮元皓（1676～1768）、金龍道人（1712～82）、伊藤若冲（1716～1800）、大典顕常（1719～1801）など多くの人々が惹き寄せられ、こうした人々の熱心な企画により『売茶翁偈語』が刊行されたからである。売茶翁の事績が一般に世に広められるのは、おそらく『売茶翁偈語』が刊行されたことによるところが大きいだろう。同書によって、多くの人々が売茶翁を認識し、同時にもてはやしたことも確かである⁽¹⁶⁾。だが、どうやらこの時点で、売茶翁は、煎茶趣味と密接に結びついて語られたわけではないらしい。そのことは、当時までの煎茶趣味が、中国趣味を母体に、陸羽（733?～804）や盧仝（?～835）といった中国唐時代の人物を崇拝・顕彰する形で展開し、売茶翁が煎茶書の中でほとんど紹介されない点からもうかがうことができるだろう。たとえば、わが国最初のまとまった煎茶書とされる大枝流芳の著した宝暦6年（1756）刊行の『青湾茶話』では、売茶翁に関する記述は「器具の銘」の項目で一点記載があるのみである。また、兼葭堂の趣味や交遊を秋成が随筆調で綴った安永3年（1774）成稿の『あしかひのこと葉』でも、冒頭部分に兼葭堂が中国の「竜井」茶を人に勧めていたことが書かれているが、後半の兼葭堂の交遊の中にも売茶翁については全く触れられない。さらに、先の『売茶翁偈語』中の「売茶翁伝」を記した大典の著作で安永3年（1774）刊行の『茶経詳説』にも、売茶翁に関する記載は一切ない。

その点で、売茶翁と煎茶趣味を密接に結びつけたのは、寛政2年（1790）に刊行された伴蒿蹊（1733～1806）の『近世畸人伝』ではないだろうか⁽¹⁷⁾。『近世畸人伝』中の売茶翁の事績については、ほぼ『売茶翁偈語』の「売茶翁伝」を受けたものであるが、売茶翁の項の最後に「兼葭堂所蔵売茶翁茶具図八品」として売茶翁の茶具を挿絵として載せている点は注目に値する。詳しくは次節で述べるが、この茶具を通して、次第に煎茶趣味の中での売茶翁の価値が引き上げられていったと思しい。そして、ついには、茶具という媒体を越えて、売茶翁の存在自体が、煎茶の「中興」という表現のもとで語られていくこととなる。柳下亭嵐翠（1767～?）が著し、享和元年（1801）に刊行された『煎茶早指南』からの次の二つの引用は、そのことを顕著に物語る。

(16) 『落栗物語』（著者未詳、安永年間（1772～81）末ごろ成立）、『笈埃随筆』（百井塘雨（?～1794）著、天明年間（1781～89）末ごろ成立）、『異本翁草』（神沢杜口（1710～95）著、安永年間成立）に売茶翁の記事が載ることから。

(17) 中野三敏校注『近世畸人伝』（中央公論社、2005年）に所収。

【史料3】

しかるに劣弟嵐翠，東遊して国に帰るの日，一老翁の肖像を携来，予にあたへて曰く，これ故の売茶翁高遊外居士なり。帰路駿府の剛堂叔師を訪ふに，偶然として机上にあり。乞て以て頭陀にし来る。居士ハ，本朝煎茶の中興なり。兄翁，茶道の俗流におちたるを傷て，扶起の志，切なりといふとも，又一朝にあらたむることあたうまじ。しかじ一転して煎茶をもてあそび，居士の清風にめでんこと，又可ならず哉。予，もとより，其及はざるを知て，樂をあらためんと思ふ所に，居士の肖像を見て，忽然として得ることあるがごとし。

【史料4】

点茶の中興ハ，利休居士なれとも，此煎茶にてハ売茶翁高遊外居士なり。尤礼式のあきらかなることハ，千氏なれとも，清風雅趣ハ，高翁又格別の人なり。実に本朝の茶神と称すべきハ，高遊外居士なるへし。

同様に、「中興」として売茶翁が認識される例は，文化4年（1807）ごろ成立した秋成の『茶痕醉言』⁽¹⁸⁾の「近世煎茶の流行するは，高遊外翁に興れり」という記述からも読み取れる。また，先の『近世畸人伝』の影響を受けて文化2年（1805）に江戸で刊行された山東京伝（1761～1816）の黄表紙『復讎煎茶濫觴』の巻末部分も，かかる中興としての売茶翁認識の一つの流れとして理解することができるかもしれない。売茶翁への認識は，このように人物としての売茶翁から，煎茶趣味の象徴や中興としての売茶翁へと変化していく。この売茶翁認識の変化を，先の【史料4】の「本朝の茶神」という叙述や，やや時代は下るが深田精一（1802～55）が嘉永2年（1849）に著した『木石居煎茶訣』の「皇国煎茶の行なわる煎茶者流みな売茶翁高遊外をもて，陸羽，盧同に比し，煎茶の鼻祖とす。宜なり。其の精行俛徳高致風韻の余りありて，よく茶中の真味を得しこと，予常に翁を推して小茶神とす」という表現から，本稿では「売茶翁の神格化」としてとらえたい。

この売茶翁の神格化は，煎茶趣味の展開に伴い，ますます盛んになり，みずからを何らかの形で売茶翁と結びつけることが，煎茶趣味の中で一つの権威付けとして作用するようになる。そして，事実かどうかに関係なく，みずからを売茶翁の系統の中に入れることを

(18) 上田秋成『茶痕醉言』西荘文庫本〔二二〕。『上田秋成全集 9 随筆篇』（中央公論社，1992年）に所収。同書には秋成の自筆本と西荘文庫旧蔵の転写本の二種があり，ともに天理図書館所蔵。両者の成立については同全集の解題を参照。本稿では同全集の記載に基づく項目番号を〔 〕内に漢数字で記す。なお，同書は未刊行ではあるが，当初は刊行を前提に成立したことを示す記事があり，当時の煎茶趣味の動向を探るうえで，史料価値は高いとみられる。

強調していく⁽¹⁹⁾。いわば系譜化である。このような系譜化が、花月庵のような売茶翁「三世」の宗匠の出現を促したのであり、それゆえに、売茶翁の神格化が、煎茶趣味から煎茶道へという方向性を導き出したともいえるだろう。

第2節 器物の伝来と煎茶具の製作

本節では、先に第二の要素として挙げた器物への関心について、煎茶趣味の展開の中での変化を考察したい。

煎茶趣味はしばしば指摘されるとおり、江戸時代中後期における中国趣味を背景に展開した側面があり、それゆえに「万暦・嘉靖・宣徳・成化等の製」「唐山製」「唐製」と呼ばれる明末清初の唐物の収集が、器物への関心の中心であった⁽²⁰⁾。だが、前述のように、『近世畸人伝』により、売茶翁が煎茶趣味の文脈において語られ、神格化されていくことで、煎茶趣味の展開は、それまでの中国趣味から一つの変容をみせはじめる。こうした変容に際して重要な役割を果たしたのは、売茶翁の茶具であったとみられる。そこで、本節では兼葭堂を中心に、彼の交遊関係の周辺で伝来した売茶翁の茶具、および、それによって象徴化された煎茶具を原形にして模造され、普及していった、器物に対する人々の関心を検討してみたい。

まず、兼葭堂が売茶翁の茶具を所蔵するに至る経緯を、兼葭堂と売茶翁の交遊を通して見てみよう。兼葭堂の交遊については『兼葭堂日記』⁽²¹⁾という史料が残っているが、残念ながら現存する『兼葭堂日記』には、売茶翁との直接的な交遊を見出すことはできない。しかし、寛政5年(1793)10月20日条に「夜 布屋佐兵衛 板屋庄平 泉屋元五郎 林良貞煎茶出ス 売茶翁茶具」という記事があり、これによると、兼葭堂は客に煎茶を出す時に売茶翁の茶具を使用していたことがうかがえる。また、秋成の『茶瘦醉言』に「郷友兼葭は、風流の名世に聞えたる人也。弱士の時都にいきて、遊外翁の晩に謁して、器を摸し、且遺物をも乞て蔵め、世に街売す」⁽²²⁾とあり、安政6年(1859)に暁鐘成(1793~1860)が兼葭堂の遺稿をまとめた『兼葭堂雑録』にも、「余平生茶ヲ好ム。酒ヲ用イズ。烹茶ハ京師売茶翁親友タリ。故ニ其烹法ヲ用ユ。老翁ガ茶具、余ガ家ニアリ。末茶モ好デ喫ス。彼茶礼ノ暇ナシ」とある。これらの記述から、兼葭堂は売茶翁と交遊があり、晩年にその茶

(19) 安政4年(1857)刊行の『煎茶綺言』を著した売茶東牛(1791~1879)や、八橋売茶(1752~1828)のような、売茶翁とは無関係ながら、みずから「売茶」を名乗る人々が出現するののもその一例であろう。

(20) 大枝流芳『青湾茶話』宝暦6年(1756)刊行、選器の項を参照。

(21) 水田紀久・野口隆・有坂道子編『木村兼葭堂全集 別巻 完本 兼葭堂日記』(藝華書院, 2009年)所収。

(22) 前掲注(18)『茶瘦醉言』西荘文庫本〔二四〕。

具を譲り受けたのであろうことが推察される。いずれにせよ、寛政2年（1790）に『近世崎人伝』が刊行された段階で、兼葭堂が売茶翁より伝来した茶具を所蔵していたことは明らかである。しかし、寛政2年（1790）以前の段階で、あまり売茶翁の茶具に関する記事が確認できないことを考えると、『近世崎人伝』により、兼葭堂が売茶翁の茶具を所蔵していることが、一般に知られるようになった側面が大きいのかもしれない。あるいは、むしろ『近世崎人伝』が契機となって、兼葭堂に所蔵される売茶翁の茶具が注目を集め、話題になったのではなからうか。そうした背景を受けて、兼葭堂自身も寛政5年（1793）の『兼葭堂日記』の記事のように、茶会などで使用したと想定されよう。

さらに留意すべき点は、『近世崎人伝』以後刊行される煎茶書に、必ずといってよいほど、兼葭堂所蔵の売茶翁の茶具が登場するようになることである。売茶翁の茶具の価値の高まりに伴い、前節で述べた売茶翁の神格化が進み、また同時に、売茶翁の神格化と結びつく形で、売茶翁の茶具も珍重されるようになったからである。こうした事情の反映であろうか、ついには売茶翁の茶具だけを集成した書物までも刊行されるに至る。売茶翁没後60年の文政6年（1823）に、かつて兼葭堂が描いた『売茶翁茶具図』を、二代目兼葭堂の木村石居が青木夙夜（?～1802）に改写させ、一帖の図譜にして刊行した『売茶翁茶器図』がそれである。この『売茶翁茶器図』は、売茶翁の茶具三十余を載せ、それぞれの茶具の由緒や伝来、当時の所蔵先などを書き込んだもので、その所蔵先の一つとして、先の花月庵の名も散見するのである。

一方で、こうした売茶翁の茶具の珍重を背景に、煎茶具の基本形ができあがり、その模造がおこなわれるようになることも重要だ。寛政10年（1798）に刊行された沢田実成（生没年未詳）の『煎茶略説』に見える「急焼も唐製をよしとす。然れども其中に好悪あり。中にも最上の品ハ高翁所持の急焼南瓜形唐物なり。清水六兵衛模形して世上に売茶翁形といふハこれなり」という記述は、売茶翁の茶具が煎茶具の「最上の品」として象徴化され、模造されていく実状を端的に示している。そうした傾向は、前述の『煎茶早指南』の「高翁好み」という表現からも看取できるだろう。さらに、『煎茶早指南』では煎茶具の模造のみならず、一般的な販売、流通が次第におこなわれるようになることを示唆する次のような記述がある。

【史料5】

高翁の時分、急焼、こんろ、茶わん等を、やき出すに其名を得たるものハ、建仁寺町三文字屋七兵衛と、清水の辺に住す梅林金三なり。今其形をうつして焼出すもの、清水の六兵

衛，同嘉助，左兵衛等，尤上作なり。六兵衛，嘉助，近頃故人になりて，今の嘉助又妙作也。左兵衛は，唐物をうつすに妙を得たるものなり。煎茶置用の陶器を，専らに，ひさぐものハ，旭峯，松風店なり。

本府富士見原の素焼豊八か弟子，豊助，右にゆふ所の人々，陶器類を何によらすうつせしが，近年次第に手練して，今ハ，風炉，こん炉等，別に京師に，もとむるに及はず。只急焼のミハ，形も品もおとらずといへとも，土に是非ある故，およはぬ所もあり。

本府煎茶の諸具を，あきのふもの，おふけれとも，就中，本町十丁目津の喜，同七丁目駒庄，今専らこれを売る。

この史料は，煎茶具や器物への関心の高まりを示すとともに，煎茶具の需要の高まりをも示している。つまり，高価な「唐物」を「うつし」模造することで，その代用品を作り，流通・販売を増加させた側面も見て取れるのである。

以上見てきたとおり，売茶翁の神格化とともに，売茶翁の茶具が煎茶具の一つの典型として見なされるようになり，煎茶具の基本形が成立した。これは，煎茶趣味の展開において，道具立てやしつらえの整備が進む契機となったと想像される。要するに，このような器物の伝来と，煎茶具の模造・販売の両面を背景に，煎茶道という方向性は育まれたのではなかろうか。それゆえに，第1章で見たように，花月庵は，唐物や売茶翁にまつわる器物の伝来，および，煎茶具の模造・流通の両面を背景に，煎茶家の中心的人物となっていったのである⁽²³⁾。

第3節 法式・点前への関心

本節では，第1章で挙げた第三の要素について取り上げ，花月庵以前の煎茶趣味における，法式・点前への認識の変化や動向を見てみたい。

煎茶の法式に対する認識は，当初，先行研究などで論じられるように，煎茶には茶の湯のように定まった法式が無い，という点を主張するものであった。茶の湯がその法則に拘束されて身動きが取れなくなっていることを指摘し，それに対して，陸羽や盧全などの例を引きながら，煎茶は法式が自在であるという点を主張するものもある。このように，煎茶書などでは，しばしば茶の湯との比較や対比を明確にする形で，煎茶の法式・点前の妥当性を主張していく。それゆえに，煎茶趣味は，茶の湯批判や否定的な茶の湯観の象徴と

(23) 花月庵が初代清水六兵衛(1738~99)や木米へ道具を注文している例や、『浪華煎茶大人集』掲載の花月庵の門人に，道具商や陶工が高弟として挙げられている例などからうかがえよう。

して理解されてきた⁽²⁴⁾。だが、次の史料を見てみよう。

【史料6】

客に対する饗式。茶寮の結構。点茶家法則備れり。古老の人に聴くべし。但守株刻舟の弊有て。進退活用ならぬ者聞ゆ。是に繋るは拙なり。是を悪むは野也。克々意を用ふべし。（中略）況や今世の人。玩器の真贋優劣の間に在を何とか云ん。然ば饗式は。点茶家古老の法則を意底に蓄へて。且自己の分限に応じつゝ遊樂すべし。只礼節闕べからず。

これは最も代表的な煎茶書で、寛政6年（1794）に刊行され、その後何度も版を重ねた、秋成の『清風瑣言』⁽²⁵⁾の一部である。もちろん、同書には茶の湯を批判的にとらえている部分が無くはない。だが、【史料6】中の「点茶家古老の法則を意底に蓄へて」という表現は、決して否定的な茶の湯観ではないだろう。実は、これと同様の茶の湯観が、他の煎茶書の随所に見出され、さらには、かかる茶の湯観からの影響として、茶の湯の法式を煎茶趣味の中に積極的に取り入れようとする意識が表面化してくるのである。そのことを如実に物語る史料に、増山雪斎（1754～1819）が著した文化元年（1804）刊行の『煎茶式』⁽²⁶⁾がある。次の史料はその冒頭部分である。

【史料7】

前年京坂之間。遊外壳茶翁ト称スル者有リ。余偶々翁之蔵スル所ノ黄銅炉・急火焼ヲ得ル。愛翫最モ甚ダシ。近日煎茶ヲ玩スル者多シト雖モ、然ルニ其ノ次第・階級ハ己ガ意ニ任セ杜撰ヲ以テ佳シト為シ、而シテ今古行ナワルル所ノ抹茶之風俗ヲ撓メント欲ス。余、意フニ今古ノ抹茶者流之風流ハ最モ賞ス可キ也。翁之煎茶風流モ亦タ賞ス可キ也。然シテ、其ノ次第階級無クンバ、則チ唯々一時之流行而已ニテ遂ニ廢ス可キ也。豈ニ惜シマザラン乎。是ニ於テ彼之非ヲ去リ、此之是ヲ取り、斟酌以テ次第ヲ立テ、煎茶之式法ヲ作為セント云。

【史料7】によると、煎茶は「次第階級」が無く「杜撰」であるとしている。このように法式が立たず、自由気ままにしているは「一時之流行」に終わってしまう。そこで「抹茶者流之風流」に倣って煎茶の「式法」を立てようというのである。これはつまり、煎茶の点前に対する関心が次第に高まりつつあったことの傍証ともなろう。以上、花月庵以前の状

(24) 前掲注(5)諸論文を参照。

(25) 前掲注(18)『上田秋成全集 9 隨筆篇』に所収。

(26) 『日本庶民文化史料集成 10 数奇』（三一書房、1976年）に所収。

況を見てみると、点前に関しても次第に関心が高まり、法式を立てようとする兆候が見て取れる。ただ、ここで留意しておきたいのは、その際、茶の湯からの影響が見られることである。

さて、本章では花月庵以前の状況に遡り、宗匠となるために重要な三つの要素について、煎茶趣味における動向を見てきたが、それによると、煎茶道という方向性は、花月庵により突然あらわれた動きではなく、煎茶趣味が広汎に展開し、広く嗜まれるようになるに従い、徐々に培われたものであることが判明した。これを煎茶趣味の変容としてとらえるならば、その契機として、第一に、売茶翁の神格化、第二に、売茶翁の茶具を中心とする器物の価値の上昇と、煎茶具の模造・販売、第三に、法式・点前への関心の高まり、という具体的な胎動があったことが指摘できるわけである。逆にいえば、このような煎茶趣味に対する意識の変化、あるいは煎茶道化という希求の高まりに乗じて、第1章で挙げたような三つの要素を主な柱とし、権威付けとすることで、花月庵は煎茶の宗匠となり得たのである。

ところで、こうした煎茶道化の動きに際して注目されるのが、本節で若干指摘したように、茶の湯との比較において煎茶趣味が叙述されるようになる点である。先行研究では、煎茶趣味は茶の湯への批判をその大きな拠り所として展開したとされるが、実際には【史料7】のような茶の湯からの影響も、少なからず煎茶趣味に見て取れる。であるならば、茶の湯と煎茶を、従来のような単純に対立する概念からではなく、新たな視点から考察する必要もあるだろう。そこで、次章では、茶の湯という既存の芸道とのかかわりと、その認識という側面から煎茶趣味の変容をとらえてみたい。

第3章 茶の湯とのかかわり

第1節 江戸時代中後期の茶の湯批判

従来、煎茶趣味は、茶の湯の遊芸化への批判をその大きな基盤として展開したといわれる。だが、第2章で見たように、煎茶趣味は、その展開において一つの転機を迎え、それにより、徐々に煎茶道という方向性があらわれたのであれば、先の理解には一つの矛盾が生じる。前述の【史料7】の記述に見られるような、茶の湯からの影響関係を考えると、煎茶趣味における茶の湯観を再検討する必要もあるだろう。そこでまず、熊倉功夫氏の『近代茶道史の研究』を参考に、江戸時代中後期における茶の湯批判の動向を見てみよう。

茶の湯への批判は、江戸時代中後期に多くの儒学者などによってなされたところである

が、太宰春台（1680～1747）の『独語』はその最も典型的なものである。その批判の骨子として、熊倉氏は以下の三点を挙げている。第一に、茶器や茶の点前の不衛生さ、第二に、客亭主間で世辞を応酬する愚劣さ、第三に、粗末を喜ぶ浅はかさである。では、太宰春台の主張する茶とはどのようなものなのであろうか。それは、熊倉氏によると、あくまで飲料としての茶であって、芸道としての茶道を否定するものであった。つまり、茶の湯批判の主旨は、その遊芸化への批判なのである。このような茶の湯批判の高揚は、天明6年（1786）に刊行された河田直道（生没年未詳）の『茶道論』からもうかがうことができる。この『茶道論』の茶の湯批判は、先に挙げた三点のほかにも、貴賤尊卑をわきまえず茶室に入り込む身分秩序の混乱や、茶の湯の宗匠の不徳にまで至る痛烈なものである。また、熊倉氏によると春台や直道のような「外部からの批判」のみならず、これと軌を一にするかのように、藪内流五世の藪内竹心（1678～1745）などによって、茶道界内部の茶人そのものから批判の動きもあらわれるようである。

かかる茶の湯批判の動向の中で、煎茶趣味も、そうした茶の湯批判の一つの胎動として位置づけられている。熊倉氏は、国学者と煎茶との関連性に着目し、秋成の著作や⁽²⁷⁾、前田夏蔭（1793～1864）の『木芽説』、岡部春平（1794～1856）の『茶記贅言』を例に挙げ、それらが中国の唐時代の陸羽や盧仝を引き合いにして、宋時代以降の抹茶⁽²⁸⁾を否定し、抹茶以前の唐時代の茶に戻ろうとする主張を展開することから、抹茶すなわち茶の湯への批判として、煎茶趣味を解釈した。このほか、たとえば、売茶翁の売茶活動も、抹茶ではなく煎茶を用いて墮落した茶の湯を批判することで、茶の湯と不即不離にある禅宗を批判したものと理解されている⁽²⁹⁾。つまり、売茶翁が煎茶を選んだ要因としても、茶の湯の腐敗とその批判の高揚が指摘できるわけである。同様に、多くの煎茶書が陸羽や盧仝をその旗印に掲げたことをもってしても、煎茶趣味が当初「茶道の原像を模索」⁽³⁰⁾することに端を発したのは明らかである。だが、前述のように、煎茶趣味は、その展開において芸道としての煎茶道を認める方向に傾斜していった。それならば、煎茶趣味が当初目指していたものとは対極にあったはずの茶の湯を、煎茶を享受し、嗜んだ人々は、一体どのように認識していたのだろうか。

(27) 熊倉氏は『清風瑣言』、『茶癡醉言』を事例として挙げているが、国文学の分野でも上田秋成の煎茶観についての研究は盛んである。だが、その中でも秋成の煎茶に関する著述は茶の湯批判として理解されている。秋成と煎茶に関する研究の主なものに中村幸彦『近世作家研究』（三一書房、1961年）、坂田素子「上田秋成と煎茶道」（『女子大國文』31、京都女子大学国文学会、1963年）、塚光一「『茶神の物語』考—秋成の創作態度—」（『文学』47、岩波書店、1979年）などがある。

(28) 熊倉氏の記述に基づき、ここでは「茶の湯」とせず「抹茶」とした。

(29) 前掲注(5)小川書『煎茶への招待』「第四章 煎茶道の成立」、前掲注(15)早川論文などを参照。

(30) 前掲注(2)熊倉書『近代茶道史の研究』62頁。

第2節 煎茶趣味における茶の湯観

前章でも若干指摘したように、煎茶趣味において、茶の湯は一概に否定的にとらえられていたわけではない。熊倉氏が茶の湯批判の顕著な典型的事例として挙げている秋成の著作を見ても、そのことはいえる。『茶痕醉言』の大枝流芳を評した部分に「浪花の大枝流芳は、翁に謁して煎法をつたへし人也。元富豪の出身、点法香技に熟せしかは、器物の高賈を宗とせられたれども、席上の式、おのつから静にて風致あり」⁽³¹⁾とあり、同じく兼葭堂を評して「点家に交はらさりしかは、席上の茶具位致乱れて、清韻を失ふ」⁽³²⁾という。つまり、「点法香技」（茶の湯や香道）に熟達していることが「風致」とされ、「点家」（茶の湯を嗜む人々）と交わらないので、「茶具の位致乱れて清韻を失ふ」というのである。この主張は、茶の湯や香道という芸道を肯定的にとらえた表現にほかならない。先の【史料6】の『清風瑣言』のみならず、『茶痕醉言』でも秋成は、「若主客の礼譲を習はんと思はゞ、前に点家の法を掟て、世にあまねし」⁽³³⁾と述べている。

ならば秋成は、茶の湯のいかなる面を批判しているのであろうか。たとえば、秋成は『茶痕醉言』の芸道に対して述べた項で次のような見解を示す。

【史料8】

藝技法式なきにはあらず。李笠翁の画□□、有法の極無法にかへれ、と云うしは聞つへし。法に入て其局中に生涯つなかれたらんは拙なり。有法をのかれて無法に帰する人ならずは、自己の逸楽は有へからず。然とも、才なき人は無法にかへりかたければ、其藝技の奴となりて、有法に終るをとかむへからず⁽³⁴⁾。

つまり、秋成の批判は芸道そのものに向けられるのではなく、それに拘束されて身動きが取れなくなる点を批判しているのである。逆に法式はある程度必要であるとしている。

もちろん、茶の湯を批判している部分が全くないわけではない。たとえば、秋成の茶の湯観を端的に示す史料に、花月庵所蔵で文化4年（1807）成立の「茶は煎を貴とす」という一軸がある⁽³⁵⁾。これは煎茶と点茶（茶の湯）の区別を論じた一文である。その中で、茶

(31) 前掲注(18)『茶痕醉言』西荘文庫本〔二三〕。

(32) 前掲注(18)『茶痕醉言』西荘文庫本〔二四〕。

(33) 前掲注(18)『茶痕醉言』西荘文庫本〔二八〕。

(34) 前掲注(18)『茶痕醉言』西荘文庫本〔三五〕。

(35) 前掲注(18)『上田秋成全集 9 随筆篇』に所収。なお、花月庵は秋成の煎茶に関する歌文も積極的に収集しており、それについては、同全集の解題を参照。

の湯の味覚における精神性の欠如を説き、高価な道具を買いあさる茶の湯の風潮を戒め、茶の湯の批判点をいくつか挙げている。だが、ここで注目したいのは文末部分であり、ここでは「茶神清故に、濁に触れて損害速か也。点家此意を得て玩へは、最清し。東坡云、佳茗似佳人。此句の意を能々腹に味ひて、煎点いつれに遊ふとも可也」としめくくっているのである。つまり、茶の湯を嗜むことを否定してはいない。むしろ、積極的に奨励しているわけである。このことは、『膽大小心録』⁽³⁶⁾の中で秋成の姉の師であった内本喜斎（生没年未詳）という茶人を誉めている例などからもいえよう。

こうしてみると、煎茶趣味における茶の湯観は、あながち否定的なものではなく、前述の【史料6】の記述のように「点茶家古老の法則を意底に蓄へて」というものであったといえよう。かかる茶の湯観から、先の【史料7】のように茶の湯を肯定的に享受し、利用しようとする動きも生じてくるのである。しかし、そのような茶の湯からの影響関係がみられる一方で、煎茶書の中で、茶の湯との比較・対比において煎茶が語られるのも、また事実である。もし、それが単なる茶の湯批判でないとするならば、このように茶の湯と対比的に煎茶趣味が叙述される意味の解明が求められるだろう。

第3節 茶の湯からの移行者

本節では、煎茶書がどのような読者をその対象者としたのかという視点から、煎茶と茶の湯との対比的記述の意図を解明したい。まずは次の二つの史料を挙げてみよう。【史料9】は『煎茶早指南』の一部で、【史料10】は『茶癡醉言』の冒頭である。

【史料9】

兄翁茶亭の趣を委敷図することハ煎茶の諸道具ありきたりたるを用ひて、かならず清虚好の器ならねば用にたゝぬとゆふことなきをしめし、せん茶に入やすきことを、あきらかにす。尤兄翁はじめ点茶を好て、もてあそびしが、其時の道具を其儘に用ゆるものおふし。図を見てしるべきなり。（中略）

擬今の世に点茶を、もてあそぶ人ハ、陸羽を煎茶ばかりの祖と心得て、取もちいぬもあり。大なるあやまり也。茶経に石転運とて、茶臼の図もあれば、散茶もせられたるなり。其外、餅茶などゝて、丸めたるもあり。しかれハ、茶のことにおるてハ、何もかも、陸氏中興と見えたれハ、点茶家にも、茶経をしりてよきこと也。

(36) 前掲注(18)『上田秋成全集 9 随筆篇』に所収。

【史料10】

前の清風瑣言に云あやまち、且云漏し、又後来に見聞し説話を、此頃の朝茶の酔こゝちに云ん。煎、点共に、益有ことは目をとゝめよ。無味の酔泣と思ふは、一煎の滓とゝもに棄去へし⁽³⁷⁾。

これらの史料から浮上するのは、煎茶を啓蒙し、煎茶書を読ませる対象者に「点茶家」が含まれているという事実である。たとえば『茶癡醉言』中に千利休（1522～91）や小堀遠州（1579～1647）、武野紹鷗（1502～55）についての記述があることや、茶の湯に関する叙述が諸所に見られることも、そのような読者としての茶の湯愛好者を、意識したものにほかならないだろう。このことを考慮に入れると、多くの煎茶書で見られるような、茶の湯との比較を用いた記述も、茶の湯のどのような側面を享受し、またどのような面が弊害に当たるのかを明確にする効果を生んでいるといえる。そうした記述は、茶の湯を前提として認識している者に対して有効なはずであろう。つまり、煎茶書を読む前提として、茶の湯をある程度理解し、あるいは習得していなくてはならないこととなる。これは、一方で、茶の湯の広汎な浸透を示唆するものでもあるが、また一方で、煎茶を勧める対象者に、茶の湯を習得した人々が存在することを示しているともいえる。要するに、煎茶書に見られる煎茶と茶の湯との対比的な記述の裏には、茶の湯から煎茶への移行者の存在が隠されているのではなからうか。それゆえに、茶の湯への批判を明確なものにし、煎茶の正当性を強調するわけである。

このような茶の湯から煎茶への移行者の存在を示す史料として、【史料3】でも挙げた享和元年（1801）刊行の『煎茶早指南』の叙文を例に取ろう。

【史料11】

茶道ハ、元来我宗門の礼数よりいでゝ、今専ら世間におこなわれとも、おふくハ道具の物すきに價の高下を論し、主客ともに進退の遅速を誹り合。真の風流を、うしのふことのミおふくして、和敬清寂の四意、一ツも存することなし。予、年来点茶をこのミ、よのつね茶室に入て黙然端坐、ひとり茶禪一味の必要をあまんじ、更に其時を伝て、風をかへ俗を改めんとす。（中略）（前掲【史料3】がこの中略部分に相当する。）

寔におゐて志を變し、点茶を捨て、煎茶にあそふこと今已に十有余年なり。此ごろしきりに世間に流行して、風流の人、煎茶をもてはやし、高翁の雅趣を慕ふもの、水のひきゝに

(37) 前掲注(18)『茶癡醉言』西荘文庫本〔一〕。

就がことし。されども乍入の輩ハ、所用の茶具、煎法の意味にくわしからず。尤先輩の数寄人、幾篇の書をあらわす。就中、清風瑣言、煎茶仕用集、煎茶訣等、専ら世におこなわるれとも、向上にして、初心の人の一見に解しかたし。この故に嵐翠に托して、予が庵中煎茶置用の諸具を図し、且煎法の意味、十に一二をしるさしめて、後進にたよりせんとす。末弟醒阿、又したかひて梓にちりはむ。幸にして其書なりぬ。因てこれを自辨茶略と題す。希ハ同流の諸君子、居士の遺風になすんて、清寂を愛せは、来て肖像を拝せよとゆふことしかり。

于時享和壬戌孟正既望尾陽府桜坊瓦礫舎主人煎茶炉上に安坐してしるす

この叙文を書いたのは『煎茶早指南』の著者である柳下亭嵐翠の師（兄）で、瓦礫舎主人（1762?～1825?）なる人物であるが、彼は嵐翠に売茶翁の肖像を見せられるまで（【史料3】）もともと茶の湯を習っていたことが記されている。このような人物が「煎茶に入りやすき」ことを示す事例として叙文に掲げられ、どの茶の湯の道具がそのまま煎茶に使えるかを詳細に説いた、この『煎茶早指南』の如き書物が刊行されるからには、茶の湯から煎茶への移行者が少なからず存在し、かかる書物の需要が高まったからにほかならないだろう。このような移行者の存在は、前述の【史料7】『煎茶式』の著者である増山雪斎の他、後に多くの煎茶書を著した田能村竹田が、当初は茶の湯を習い、印可まで得ていることなど、煎茶趣味を先導していった人々が、実際には茶の湯に従事していた点からもうかがうことができる。彼らが煎茶に移行した共通点として、【史料11】の前半部に見られるように、茶の湯の墮落に満足していなかったことが挙げられる。これは、煎茶趣味が茶の湯への批判という側面を有していたことの証左でもあるが、同時に、茶の湯に照らし合わせて煎茶を啓蒙し、茶の湯の形態を積極的に取り入れようとする側面の存在を示唆することも見逃せないだろう。たとえば、売茶翁を「中興」としたり「茶神」として崇拝する陰には、利休との対比の元で語られることに留意する必要があるだろう。

以上のことから、煎茶趣味が広汎に流行し展開する背景には、茶の湯への批判の高まりを契機とした、茶の湯からの移行者の存在が指摘できる。いわば、茶の湯の広汎な展開・浸透に寄りかかる形で、煎茶趣味がその愛好者を増加させていったということが浮き彫りになったわけである。それゆえにこそ、煎茶趣味に煎茶道という方向性が出てきたのではなかろうか。つまり、煎茶道は、太宰春台などによって示された茶の湯批判への、芸道としての一つの答えであったといえるのかもしれない。だからこそ、煎茶が茶の湯に代わる新しい芸道として認知され、花月庵のような煎茶の宗匠が登場してきたわけである。

おわりに

以上のように、本稿では、田中花月庵を題材に、江戸時代中後期における煎茶趣味の展開について考察することで、その変容を指摘し、また、いくつかの要因を解明した。その要因として、まず第一に、煎茶趣味の展開における売茶翁の認識の変化を挙げた。本稿では、かかる変化を「売茶翁の神格化」としてとらえた。ここで、さらに付言するならば、売茶翁が陸羽や盧仝と同様に、茶神として「肖像」化されることも、この売茶翁の神格化と無関係ではないだろう。

第二の要因として、先の売茶翁の神格化と結びついて、売茶翁の茶具の価値が上昇し、同時に、煎茶具の基本形が成立することを示した。そして、その基本形に基づいて煎茶具の模造がおこなわれ、販売され、流通する。これは、ある意味では煎茶道具における「唐物」から「国焼」という方向性を導き出したといえるかもしれない。もちろん、国焼の煎茶具は、後の茗謙の主要な煎茶具にはならなかったが、販売・流通の面で、果たした役割は大きいだろう。

第三の要因として挙げたのが、茶の湯観の変化と、それに伴う法式・点前への関心の高まりである。さらに、茶の湯観の変化の検討により、煎茶趣味を啓蒙する対象者として、茶の湯からの移行者の存在があることを指摘できた。このことは、既存の広汎に展開する芸道（茶の湯）に依存する形で、煎茶趣味が展開したことを示唆するものである。

さて、そこで問題となるのは、本稿で明らかにした煎茶道の成立の過程を、近世芸道の研究史の中でどのように位置づけるかという点である。つまり、先に挙げた煎茶趣味の展開における変容とその要因が、他の芸道との比較において、妥当性を備えているのかということである。すなわち、ここに、他の家元成立の研究との関連性を検討する必要性が生じてくるといえよう。

家元の研究については西山松之助氏の茶の湯、香道、華道、武術など非常に多岐にわたる研究がある⁽³⁸⁾。その中でも、特に茶の湯と俳諧の宗匠についての考察において、西山氏は以下の点を家元成立の主要な要素として挙げている。第一に、「回帰思想の指向」として、初祖・流祖への回帰思想により自己の流派の正統性を主張する点、第二に、優劣の審判権、道具の審美眼・鑑識眼の絶対的優位性が家元に存する点、第三に、「秘技相伝」として「わ

(38) 西山松之助『家元の研究』（校倉書房、1959年）、西山松之助「宗匠というもの」（中村幸彦編『芭蕉の本 1 作家の基盤』角川書店、1970年）、西山松之助「近世芸道思想の特質とその展開」（『日本思想大系 61 近世芸道論』岩波書店、1972年）などを参照。

ざ」「型」の優位性とその相伝権を家元が有する点である。第一点の回帰思想については、例として利休回帰や芭蕉回帰を取り上げ、新しい家元が創流される際に、とりわけ大きな意味を持つものとして位置づけている。また、第三点に関しては、相伝の形態に注目し、家元による相伝権の独占の問題を重視している。この三点の他にも、名取制度の問題などの指摘もあるが、以上の西山氏の論によりつつ見るならば、先に挙げた煎茶趣味の変容における要因は、煎茶の宗匠のみならず、一般に家元や宗匠が成立していく、あるいは意図的に作られていく際の、一つの指標として敷衍できるのではないだろうか。

たとえば、茶の湯と煎茶との関係を、既存の芸道に対する新興芸道の認識として還元するならば、西山氏もしばしば指摘されておられる和歌・連歌と俳諧との関係に、茶の湯と煎茶を置き換えて考えることも、あるいは有効な試みだろう。であるならば、同時期の文学や美術の分野でしばしば指摘される「雅」と「俗」の関係に、茶の湯と煎茶の関係をあてはめてみることも可能かもしれない⁽³⁹⁾。俳諧が芸道成立における近世的特質を示す一つの表象であるとするならば、煎茶にもまた同様のことがいえよう。かかる視点に立ってこそ、初めて、既存の類似する文化形態をどのようにとらえ、あるいはどのように批判し、またどのように利用するかという新興芸道の一つの近世的特質が浮き彫りにされるのではなかろうか。

さて、このように煎茶趣味の展開におけるいくつかの問題を解明できた部分はあるが、課題も多く残されている。まず第一に指摘できるのが、兼葭堂や聞中の重要性についてである。花月庵が売茶翁「三世」を主張するときに、忘れてはならないのが、花月庵と売茶翁の間にいる聞中の存在であろう。売茶翁伝来の茶具などの箱書きの多くを兼葭堂や聞中がしていることから、売茶翁の神格化に彼らが果たした役割は、非常に大きかったことが想像される。花月庵を家元たらしめる際に、花月庵を周囲から盛り立てたのは彼らのような存在である。花月庵が家元となる、あるいは煎茶の家元が成立することで彼らの得るところも大きかったのではなかろうか。そのような様々な目論見が錯綜する中で、花月庵が家元となったことに留意する必要があるだろう。今一つ挙げたい課題は、茶の湯以外の芸道とのかかわりである。本稿では茶の湯についてのみしか触れなかったが、煎茶趣味はその展開において、その他の芸道、とりわけ香道とも密接な関係にあると想定される。大枝流芳や田能村竹田が、香道に深い造詣を持っていた例からもそれをうかがうことができるだろう。

(39) 江戸時代の文化における「雅」「俗」の関係については、中村幸彦『戯作論』（角川書店、1966年）、中野三敏『十八世紀の江戸文芸』（岩波書店、1999年）などを参照。

以上、検討の不十分な部分や、未検討の問題が多く、拙い考察となったが、従来あまり注目されることのなかった煎茶趣味を、江戸時代中後期の文化の中に位置づけ、考察することで、西山松之助氏などの指摘する遊芸文化の反映として、煎茶趣味をとらえる一助にはなったのではないだろうか。煎茶趣味が煎茶道として広汎に展開していく背景には、同時期の文学や美術との密接なかかわりとともに、こうした「雅」「俗」の関係にも似た、既存の芸道との拮抗とせめぎあいの歴史が読み取れるのである。

付 記

本稿は、2000年1月に大阪大学文学部へ提出した卒業論文の内容をもとに、大幅な加筆修正をおこなったものです。卒業論文提出後も、煎茶に関する新たな論考が数多く発表されていますが、売茶翁の神格化や、煎茶道における茶の湯からの影響を、芸道や「雅」「俗」の関係から指摘したものは、管見の限り見当たりませんでしたので、近年の研究動向を踏まえて加筆修正したうえで、掲載させていただきました。卒業論文の執筆に際しては、大阪大学文学部村田路人教授をはじめ、多くの方々からご指導やご教示を賜りました。記してここに感謝の意を表します。